
けいおん ～とある軽音部の恋物語～

SAIYUー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん　〜とある軽音部の恋物語〜

【Nコード】

N7918Q

【作者名】

SAIYU

【あらすじ】

共学となった私立桜が丘高校に転校してきた主人公佐藤ユウ。

彼は廃部寸前の軽音部に入部すること…　そこで、鈴木純・中野梓・平沢憂との部活動を開始するが、梓、憂、純の三人はユウに密かな恋心を抱くこととなる。　軽音部女子三人の恋の行方はいかに…

主人公、佐藤ユウは私、SAIYU（サイユ）をモチーフにしたオリジナルキャラクターです。

まあ、私の分身みたいな感じということです。　もしかしたら、キ

ヤラ崩壊の可能性があると思いますが、その点に関してはあらかじめご了承くださいと思います。

プロローグ

中学1年の時…父親の仕事の都合により、福島に行くことになった。

「…また、会えるよね？」

一人の少女が俺に質問する。

『…大丈夫！また会えるって！ 元氣出せよ！！』

俺はそう答えた。しかし、少女は今にも泣き出しそうです。

『…泣くなよ…純…俺まで…泣きたくなるだろ…』

俺だって…泣きたいと思った。でも…泣き顔は…見せなくなかった…。

「ユウ…そろそろ…行くぞ」

『分かってるよ…お父さん…』

俺は父さんにそう言っていると、

『…じゃあな…純…』

少女…鈴木純にそう言っていると、俺は…両親と共に福島へ向かった。

そして…5年後…俺は…再び…この地に…

あいつのいる…この地に…戻ってきたのである…

転校生

『今日から…この学校か…』

共学となった私立桜が丘高校に転校した少年、佐藤ユウ…。

『（純…俺は…俺は戻ってきたぞ！）』

そう心の声で呼びかけた俺は、校舎内へと入っていった。ある事を思いながら…

『（それにしても…あいつ…誰だったんだ？）』

…一週間前、俺の入るクラスの担任山中さわ子先生に挨拶をしに一度訪れた時…

あの時に廊下ですれちがった女の子。誰なのか、その時は分からなかったけど…。

「どう？この高校の印象は。」 さわ子先生が俺に聞いてきた。

『まあ、いいんじゃないかな。』 よく分からないから俺はそう答えた。

「…答えになってないわよ。」

『しょうがないじゃないですか、まだ分からないこといっぱいです

よ。』

そんな話をしているうちに…

「ここが、あなたのクラスとなる教室よ。」

『3年…2組ですか、いいですね。』

3年2組、俺はこのクラスの一員となる教室。

「じゃ、私が合図したら入ってきてね。」

『合図？ …うん…どんな感じ？』

「普通にね、何か勘違いしてない？」

『あ、はい、分かりました。』

こんな期待感を持ってしまったのは俺だけか？

…まあ、いいか。それが普段通りのやり方だからね。

「はーい、みんな、席に座ってー！。」

一部の生徒は、

「うわ、先生きたー！！」

「ヤバイ、ヤバイ」

友達と話してたんだろうね。慌てて席に座っている生徒がいた。

「今日は、みんなに転校生を紹介します。」

さわ子先生がそう言うとき：

「て、転校生！？」

「誰なの？誰なの？」

「先生、早く、早く転校生紹介してよ。」

みんな、転校生がきたと聞いた瞬間、いきなりそんな声が飛びかった。

『（うおっ、びっくりしたー。珍しいのか？ 転校生が来るのって。）』

そう思ったが、とりあえず冷静になる俺であった。

「静かにね。じゃ、入ってきてー。」

『（ほんじゃ、行きますか）』

先生に呼ばれた俺は、教室へ入っていった。

「かわいいー！！」

「女の子みたい！」

「男の子だよな！」

俺の事を見た感じでそんな話になっているし、女の子みたいって言うっている人もいるが、
これでも男性です。男の子です。

「自己紹介よろしく。」

『あ、はい。初めまして、佐藤ユウです。』

「ユウ君か〜。」

「名前はカッコいいんだけどな」

『えっと、福島から来ました。』

「えっ、福島から？」

「福島からだってよ」

「福島県民なの？」

でた！！ 福島県民って言葉！！
○密のケン○ンシ○ーでもほとんと言わないよ。
まあ、それは置いといて…

『…一年だけだけど、これからよろしく。』

…その生徒の中で…

「（ユウ：佐藤ユウ：もしかして：）」

「（あ、あの人って：）」

二人の少女はそう思っていることを、俺は：知らないのだった。

「では、ユウ君の席は窓側の後ろから二番目ね。」

『あつ、はい：。』

：って、よっしゃ！ 窓側やんけ！ ……ある意味ノリノリな俺は席についたのであります。

とりあえず、俺の桜高生としての生活が始まることになるのでした。

出会い・再開、そして入部！（前書き）

SAIYU「初めまして、SAIYUです。」

ユウ「初めまして、佐藤ユウです。前書きと後書きは俺とSAIYUが担当します。よろしくお願いします。」

SAIYU「プロログ、短めでした。ごめんなさい。」

ユウ「：謝ることか？」

SAIYU「そうです。」

ユウ「気が済んだか。」

SAIYU「済みました。」

ユウ「では、タイトルコールお願いね。」

SAIYU「イエッサー大佐！では、『出会い・再開、そして入部！』始まりです。」

出会い・再開、そして入部！

本日の授業は終わった。しかし、佐藤ユウにはある試練があった。それは…質問タイムである。

『ま、まさか1時間もかかっていたとは…』

本当なら、30～40分で終わる…と思っていたが、これは想定外だったようだ。

『とりあえず、早く決めないとな。』

彼は今、入部届けの用紙と格闘中…

『卓球部は…前の学校でやってたからなあ、どうするか…。』

佐藤ユウがこの高校に通う前、やっていた卓球部。違う部活をしてみたいと思っていた。

しかし、なかなか決まらない。すると…彼の後ろから、

「あんた、ほんとに帰ってきたんだね」と声をかけてくる。

『こっちは今取り込み中…って、え？』

後ろを振り向くと、そこには…

『純！？鈴木純か？』

そう、彼、佐藤ユウの幼馴染の鈴木純であった。

「久しぶり、元気そうじゃない」

『お前もな、って、あれ？』

ユウはあることに気づいた。それは…

『純、その二人…』

彼女の両隣に二人の少女が一緒にいたからだ。

「あっ、初めて会うよね。中野梓と平沢憂、私の友達だよ。」

「平沢憂です。」 「な、中野…梓…です。」

『憂ちゃんと…梓…ちゃ…ん？』

少女、中野梓の頬は赤い。そして、ユウの頬も…

「ん？…どうしたの？二人とも」

『純…俺、会ったこと…ある。』

この話に、純は驚いた。

「ええ！？…そうなの？梓！？」

「うん、私も…会ったよ」

梓はそう答えた。

「な、何で？ どこでなの？ ユウ、何で？」

『1週間前、この学校に一度来たんだよ、その時に会ったんだ。』

俺は純に理由を言った。

「そうだったのねえ、驚いちゃったわ、ほんとに」

『そりゃそうだろうな、っで、用件は？』

「あっ、そうだったね。梓、あとよろしく!!」

「純が言えればいいでしょ？」

「梓、部長でしょう？」

…部長？何部なんだ？俺は疑問に思っていた。

「まったく、分かったよお…」

と、ここで梓はこう言ってきた。

「ユウ君、軽音部に入部しない？」

『軽音部？』

ってことは、この三人は軽音部の…

「そう言えば、ユウ君の趣味って音楽だったよね。」

今までの成り行きを見ていた憂がようやく口を開いた。

「んで、ドラムとベース、得意だったよね。」

純は俺にそう聞いてきた。

『な、何で知ってるの?』

「何でって、自分から言っていたじゃないの」

あの質問タイムの時に言っていたことを思い出して笑みを浮かべた。

『なるほどね、聞いてたのか』

「っで、どうするの?」

純が俺に聞いてきた。

『…分かった。軽音部、入ってやんよ。』

「やったー」

「よかったー」

「ありがとう、ユウ君」

『いいって、さてと、決まったことだし…』

俺は入部届けに「軽音部」と書いた。

『これで…よしっと、んじゃ、職員室行ってくるから。』

そう言って俺は、教室から出ようとするが、一度立ち止まり、彼女達を振り向き、

『純、憂、梓、これからもよろしくな』

「うん、よろしくね、ユウ君」

軽音部を代表し、梓がそう答える。

俺は、ニコリと微笑み、職員室へ向かう。

新生軽音部、ここに誕生したのである。

出会い・再開、そして入部！（後書き）

ユウ「…大佐って、お前は軍人か!？」

SAIYU「細かい事は気にしないの。」

ユウ「まったく…、まあ、いいか。」

SAIYU「ちなみに言っておくけど、私は軍人ではないですよ。」

ユウ「知ってるって!」

SAIYU「ハッハッハー!」

ユウ「…何でご機嫌なんですか?」

SAIYU「では、次回またお会いしましょう。」

ユウ「無視すんなー!ー!」

部活く軽音部という名の楽園? (前書き)

SAIYU「私の楽園はどこにあるのか?と思うSAIYUです。」

ユウ「楽園と思えない世界にいたと思っている佐藤ユウです。」

SAIYU「どんな世界なの?」

ユウ「:話したくない。」

SAIYU「:じゃ、タイトルコールよろしく:ハア:」

ユウ「では、『部活く軽音部という名の楽園?』始まりです:って、落ち込むな!」

部活く軽音部という名の楽園？く

軽音部に入部することになった佐藤ユウ。

しかし、何かが違っていた。

『純、俺たち今、部活してんだよね？』

「うん、そうだよ」と純。

これは…部活というより…

『どう見てもお茶してるだけだろ！？後、お菓子食べてるし！！』

どう考えてもお茶飲んだり、お菓子食べているだけで部活ではない！と彼は確信した。

「いいじゃん、別に」

純はそう言ってお茶を飲む。

『（ダメだ、話にならない…）』そう思った俺は、

『梓、何でティーセットあるんだ？』

とりあえず、梓にそう聞いてみる。

…何で呼び捨てなのか、疑問に思うだろう。お互い友達となったので、呼び方を変えたのである（3話終了後）。

「えっと、先輩方が私達の分として置いててくれたんだよ。」

軽音部部長、梓がそう答える。

先輩方：つまり元軽音部の伝統を受け継いだってことか…。

『なるほど、それですか。』

「そういうこと」純はそう言って、お菓子を一口。

『（やっぱこいつだめだわ…）』俺はそう思う。特に純、お前には。

『梓のそのコップ、かわいいけど…何で猫？』

俺の質問に答えたのは、梓ではなく憂だった。

「それはね、私のお姉ちゃんが選んだので、あずにゃんにはこのコップが似合うって言ってたんだよ。」

『そうだったんだ。』

そして俺はあることを思う。

『（…あずにゃん？誰だ？）』

あずにゃん…気になるワードだ。そう思っていたら…

「気になるのねえ？」

『まあな…って、さわ子先生!?!』

「い、いたんですか?」

「び、びっくりした!!」

いつの間にいたのか、突然現れたさわ子先生に驚く軽音部一同。そして、

「何よお、いて悪いの?」とさわ子先生。

『悪くはないですけど、いつの間にいたんですか?』

「それよりい、知りたいんでしょう?」

『(…無視かよ…) んで、知りたいって何が?』

「あずにゃんって誰のことか、知りたいでしょ?」

この教師、知っているのか? なら、聞くしかない。

『あ、あずにゃんって…誰のことですか?』

もう…後戻りはできない。俺は覚悟を決め、さわ子先生に聞いた。

「あずにゃんはあなたの目の前にいるわよ。」

『どういうこと?』

俺の目の前にいるのは、軽音部部長の梓…えっ、まさか、あずにゃ

んって…

「そう、あずにゃんってのは、中野梓のことだよ」

…マジかよ、…でも、意外とかわいいあだ名だな。

『なるほどね、あずにゃ…ん?』

殺気を感じ、俺は梓を見る。

梓の周辺に漂う黒いオーラ。…ヤバい、俺…もしかして…今日ここで…死ぬの?

『お、落ち着いて、あずにゃ…ああ、ヤバい! また…』

「忘れろーーーー! うおらああああ!」

『ぎゃあーーーーーー!』梓、ごめんなさーーーーー
『い!』

俺…見事にフルボッコ。一瞬、三途の川が見えたことを彼以外に知る者なし。

『…し、死ぬかと…思った…』

「大丈夫?」と、憂が心配した顔で俺を見る。

そんな彼に神はこう告げるだろう…

ここで死ぬ定めではない、そして…軽音部という名の楽園は存在し

ない…と。

…でも、もしかしたらほんの小さなことで楽園と感ずることがある
のではないか…

彼に神の祝福があらんことを…。

部活く軽音部という名の楽園?く(後書き)

SAIYUー「ハァ…」

ユウ「まだ落ち込んでたの?俺が落ち込みたくなつたよ!」?

SAIYUー「…何で!」?

ユウ「何で?じゃないよ!!何故俺があんな目に遭わなきゃならないんだ!」?

SAIYUー「では、次回またお会いしましょう!」

ユウ「だから無視すんな!そして開き直り早いな!」!

帰り道（前書き）

ユウ「SAIYUーさん、起きてください。」

SAIYUー「起きてるよ。」

ユウ「…寝てましたよ。」

SAIYUー「…寝てた？」

ユウ「…ええ、寝てましたよ。」

SAIYUー「……。」

ユウ「……。」

SAIYUー「…すみません。」

ユウ「…では、タイトルコールお願いします。」

SAIYUー「分かりました、『帰り道』始まるぜよ。」

ユウ「さ、坂本龍馬!？」

帰り道

部活…というか、練習は結局やれなかった。

俺、佐藤ユウはかろうじて生きている…梓に殺されかけたが俺は生きています。

そして今、俺たちは学校の帰りです。

軽音部のメンバー、憂・純・梓と一緒に帰っております。

もちろん、自宅にです。 寄り道などしていません。

「誰に説明してんの？」と純は俺に聞いてくる。

『説明？俺が？誰に？』

疑問3連発を純に返す。

「知るか!!」

…適切なツツコミをありがとう。

まあ、それはそれで置いといて…。

『梓…、俺死ぬかと思ったよ。』

「元と言えば、ユウが悪いんだからね」

『…すみませんでした。』

悪気はなかった。

だが、少し気になったただけである。

「わ、私もやりすぎた…ごめん。」

とにかく、これでユウと梓は仲直り成立となった。

「（よかったね、ユウ君）」と憂はそう思っていた。

『純、お前…人一倍お菓子食べていたよな？』

「え？ そうだったっけ？」

『そうがよ、練習やれなかっただろ？』

「明日その分練習すればいいだけじゃん。」

『ほんとにやるのか？』

「…多分ね♪」

『（多分かよ…）』

「純、明日はちゃんと練習するんだからね。」

「…分かったよお」

ほんとに明日練習するのか?…そう思う佐藤ユウであった。

『まあ、ちゃんと練習するってんなら、ちよつとはお茶会しても…いいよな?』

「…そう、だね。」

「ほ、ほんとに? んじゃ、明日は頑張って練習するぞー!。」

『(こいつ…調子こいてんなよ…)』と思うユウ。

「あ…アハハハ…」と苦笑している梓であった。

「あつ、そうだ!」ふと何か思いついた純。

『ん? どうした?』

「ユウ、梓と憂の家、初めてだよね。」

『ああ、そういえば…そうだな』

「でしょ? なら、今度の日曜、遊びに行ってみたら?」

『…え?』…戸惑う俺。

「ちよ、ちよつと! 純、何言ってるの!?」と慌てる梓。

「あつ、いいねえ、純名案だよ。」と憂。

「憂まで!?。」

「どうなの？梓？」と純はなぜかニヤニヤとして梓に聞いている。

「もう…分かったよ。」

純に負けたようだな…そう思う俺であった。

『んで…どっちからで？』

「それはユウが決めなよ」

『そうだな、それじゃ…憂、いいかな？』

「え、…うん、いいよ。」

「…んじゃ、次私ねえ。」

『純、お前は3番目ね。』

「ええ！？何で？」

『だって、お前の家には何回も行っただろ？』

「…そ、そうだったかなー」

『（この野郎…忘れやがったなあ…）』一度ぶん殴ってやろうか…
と思ってしまった俺。

「じよ、冗談だよ！ま、まさか殴ってやろうとか思っていないでしょ
うね？」

『お、思っていないからな!』心を読まれて思わずドキツとする俺…
だった。

「…ふふっ」と笑い出す梓。

それにつられて笑ってしまう純、憂、そしてユウ。

久しぶりに楽しく帰れそうだと思うユウであった。

帰り道（後書き）

ユウ「坂本龍馬になってましたけど…」

SAIYU「え？ なってた？」

ユウ「なっていましたよ。」

SAIYU「偉人の中で特に気に入ってんのよ。」

ユウ「そうだったの？」

SAIYU「そうだよ。」

ユウ「意外ですね。」

SAIYU「何かいった？」

ユウ「いや、何でもない。」

SAIYU「……。」

ユウ「……。」

SAIYU・ユウ「では、次回またお会いしましょう。」

自宅訪問（憂宅編）（前書き）

SAIYU「…ユウがいない…どこに行ったんだ？」

梓「休憩中だよ、ユウ君は。」

SAIYU「そうなのか…って、なんで梓がここに！？」

梓「ユウの変わりとして来ました。」

SAIYU「あ…そうだったの…だったら、タイトルコールする？」

梓「えっ、いいの？」

SAIYU「いいよ、やりなさいな。」

梓「はい、では、『自宅訪問（憂宅編）』始まりです。」

自宅訪問（憂宅編）

俺、佐藤ユウは、憂の家に遊びに行っています。

…というか、憂の家の前にまで来ています。

俺はとりあえず、呼び鈴を鳴らした。

そして、玄関のドアを開けたのは憂。

「あつ、いらっしやい。」

『よつ、憂。』

「さつ、入って入って。」

『あつ、では、お邪魔します。』

そう言って俺は中へと入った。

そして、リビングへ入った俺の目の前には…

「憂く、うくいく、アークス。」

そう言っでごろごろとしている一人の女性。

「もう、お姉ちゃん、さっきアイス食べたでしょ？だから、後でね。」

『お姉ちゃん?』

この人が…憂のお姉さんなのか…そう思う俺であった。

「うゝいゝ、アゝイゝスゝ。」

「…もう、しょうがないなあ…あつ、ユウ君もアイス食べる?」

『う、うん、お願い。』

「分かった、ちょっと待ってて。」

そう言って、台所へ向かう憂。

「ねえ、君の名前は?」とその女性は俺に聞いてきた。

『あつ、佐藤ユウです。』

「佐藤ユウ…か、んじゃ、あだ名はユウちゃんて決定だね。」

『ユウ…ちゃん?』

「うん、ユウちゃん。」

ユウちゃん…そう呼ばれるのは久しぶりだと俺は思った。

「えっと…ダメかな?」

『ダメではないですよ、ただ…』

「ただ？」

『えっと…その…な…懐かしいって言うか…そう呼ばれた事…あったから…』

「そうだったの？」

『は…はい…』

「おまたせ、はいお姉ちゃん、アイスだよ。」とそう言ってア
イスを渡す憂。

「ありがとう〜憂〜。」

そう言ってアイスを受け取る女性。

「はい、ユウ君の分だよ。」

『あ、ありがとう。』

そして、三人でアイスを食べた。

『そう言えば、君の名前…まだ聞いてなかったですね。』

「あっ、自己紹介がまだだったね。」

そう言うのと、その女性は立ち上がり、

「平沢唯です。大学生です。」と言って、ビシッと敬礼した。

『（だ、大学生！？しかも何で敬礼するの！？）』と驚いていまい
佐藤ユウであった。

「よろしくね、ユウちゃん。」

『あつ、はい…よろしく…です。』とユウはそう言った。

「ユウ君は私と梓ちゃん、純と同じクラスで、部活も一緒なんだよ。」

「そっかあ、ねえユウちゃん、あずにゃん頑張ってる？」

『あつ、はい、頑張ってますよ。部長ですから。』

「そっかあ、よかった。」

『唯先輩…』

「ん？何？」

『聞きたいことが…あるんですけど…』

「聞きたいことって…何かな？」

『唯先輩は、何で梓の事をあずにゃんって呼んでいるんですか？』

俺が一番気になっていたこと…梓をあずにゃんと呼ぶ理由を聞いてみた。

「うーん……」と首を傾げて考え込む唯。そして…

「…何でだろうか。」

『…………』まさかの返答に言葉を失ってしまう俺。

「お、お姉ちゃん…」

「えっ、あっ、冗談、冗談だよ…」

『（冗談かよ…）』と誤ってしまふ俺であった。

「えっとね、あずにゃんが軽音部に入部してきた時に…」

唯は梓をあずにゃんと呼ぶ理由を語り始めた。

当時の部長であったりっちゃんこと田井中律が用意したネコ耳（梓はなぜネコ耳があつたのか分からなかったらしい）を梓につけてみたら、相当似合っていたらしく、唯が勝手にあずにゃんと呼ぶようになった…ということがその理由だということだ。

『…ようするに、ネコ耳をつけた梓があまりにも可愛かったから…
ってことですね。』

「えへへ、そういうことだね」

『（唯先輩らしい理由…だな）』そう思い、笑みをこぼす俺。

「どうしたの？ユウ君？」

『何でもないよ…』と俺は憂にそう答えた。

…そしてその帰り道のことである。

『平沢唯先輩…か』と俺は今日知り合った憂の姉のことを考えていた。

『憂のお姉さんなのに、まるで憂が唯先輩の姉じゃなかった。』

俺は初めて、出来た妹だと思ふようになった。

すると…

「滯く、早く早く」

「お、おい、律、そんなに急ぐことはないだろ」

前方から走ってくる二人の女性。そして…

「律！前、ま！え！」

「えっ、うわわわっ」

『おっと！』

俺はぶつかる寸前に右へと避けたが、その女性は…転んでしまった。

「いってえ…」

「律！だから言っただろ、急ぐことはないって！」

『あ…あの…大丈夫ですか？』

俺は律…と呼ばれた女性に声をかけた。すると…

「避けんなよ！」

『ええ！何で！？』

「この馬鹿！」

漣…と呼ばれた女性が律の頭を殴った。

「いっつてえー！ー！ー、漣！ー！」

「律！何か言うことあるだろ！」

「…ご、ごめんなさい」

「あ、ああ、気にしてないですから…その…大丈夫…ですか？」

「うん、大丈夫！」

そう言って、立ち上がる律。

「ほら、漣、行くぞ！」

そう言うと、律はまた走っていった。

「お、おい、律！…ったく、ほんとごめんね。」

『気にしてませんから、それより、そんなに急いでどこに行くんですか?』

「ん? ああ、ちょっと、友達に呼ばれたからね。」

『そうでしたか…』

「み〜お〜! は〜や〜く〜!」

「あ! ごめん! 今行く!」

そう言って、滯は走っていった。

『…何だったんだろうか…』

あの二人の女性…律と滯に疑問を抱く俺であった…。

自宅訪問（憂宅編）（後書き）

梓「ここで滯先輩と律先輩の登場ですか…」

SAIYU「そう、今後のやり取りに期待してね。」

梓「…ちょっと早すぎる登場だと思うけど。」

SAIYU「細かい事は気にすんなって。」

梓「そうですね、では…」

SAIYU・梓「また次回お会いしましょう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918q/>

けいおん ～とある軽音部の恋物語～

2011年11月13日17時34分発行